

## 第18回 日本慢性看護学会学術集会 交流集会のご報告

慢性疾患看護専門看護師研究会の会員が企画、担当をし、第18回 日本慢性看護学会学術集会 交流集会に参加いたしました。

開催日時：2024年8月10日 10:30～11:50

テーマ：『その人らしい療養生活を継続するための「つながる」支援』

参加者数：参加者79名 ディスカッション参加者76名

交流集会の内容：企画担当者から事例紹介

CNSが実際に行った「つながる」支援を紹介し、参加者の皆様とグループディスカッションを行った。



参加者の多くは病院勤務の看護師さんでありましたが、急性期病棟に勤務されている方や訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所や地域包括支援センター、看護学生さんと幅広い皆様に参加いただきました。また、参加のきっかけの多くがテーマに興味があったからということで、日ごろから職種間、施設間での連携、『つながる』支援に関心をもっていらっしゃるものが伺えました。

### アンケートの結果より

【その人らしい療養生活を継続するための『つながる』支援について考えることができましたか】には、



- ・患者さんの思いを丁寧に聴くことがまず大切ということがわかった
- ・多職種で色々な視点から患者に関わって行く必要が大切だと感じた
- ・活用できる人や機関を考え、活用できそうな糸口もみえた。

【交流集会についてのご感想やご意見】として、

- ・他施設の方とディスカッションし、自施設以外の視点を知ることにより理解を深めることができた

- ・つづることに日々悩んだり、困っている。つなぐことの難しさ、同じ困りごとをかかえている医療スタッフが多いことを話すことができ、共有できた。

- ・情報共有や職種間でのつながりが大事なと思った。
- ・誰にどのような相談をしたらいいのか、その方法が分からず迷走している患者の多さを実感した。
- ・看護の力でつなぐをより多くつくり、その人のサポートの網が太く強固になるよう考えていきたい。
- ・参加者さんそれぞれ頑張っておられることを聞くことが出来て、活力や勇気をもらえた。

### 【交流集会を終えて…企画、担当者より】

本人の意向をつなぐには、まずは意図的に症状コントロールをしながら、どんな暮らしをしてきたか・していきたいか理解し、バラバラになっているベクトルを同じ方向に向けていくことが必要であると考えます。意見交換でも挙がっていたように、難しい局面、分断されそうな場面において丁寧に紐解き、われわれ看護職が中心となつてつなげ続けていくことが必要であることが、今回の交流集会で参加者の皆様と共有できました。また、学術集会の運営・会場係の看護学生の皆様から自分たちもカンファレンスに参加したいと希望があったことはうれしいことでした。参加していただいた皆様、ありがとうございました。

### 【企画担当者】

武末 磨美	筑波大学附属病院
能見 真紀子	砂川市立病院
寺尾 多恵子	日本赤十字社医療センター
新屋 理良	札幌孝仁会記念病院
坂本 貴紀	京都大学医学部附属病院



記：学会交流推進委員会